

平成25年度 学位記授与式 学長告辞

本日ここに、学位を取得された皆さんに対し、大学を代表して祝意を表するとともに、皆さんをこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申しあげたいと思います。そして、皆さんが明日からの新たな道を歩み始めるにあたり、「松ヶ崎から世界に飛翔せよ」これを卒業生の皆さんへのはなむけの言葉としたいと考えます。

京都工芸繊維大学は今こそ卒業生と共に、世界に羽ばたき、飛翔しなければならない、その絶好の機会がやってきたのです。

京都工芸繊維大学は、昨年秋、文部科学省から全国立大学86校中12校の一つに選抜されました。すなわち世界的な競争力をつけ、世界で戦える大学になれ、文部科学省も応援するぞ、という意味です。まさしく大学の名誉であり、皆さんと喜びを分かち合いたい。またこうした絶好の機会が得られたのも、これまで卒業生が各自の分野において努力と実績を積み重ねてきたからであり、皆さんの明日からの活躍についても大いに期待しているところです。しかしこれはまだ、オリンピックの代表選手に選抜されたようなものであり、何としてもメダルを取って、世界に冠たる大学にならねばなりません。

本学は今、大学改革の真っ最中にあります。国立大学は、自らの歴史を振り返り、今を見つめ、社会の期待に応えるため、設立の根本に立ち還って、大学ミッションの再定義という作業を行ってきました。その過程で山田京都府知事、門川京都市長、京都経済四団体の長との意見交換を行い、文部科学省との協議を重ねた結果、京都工芸繊維大学は、デザイン学、建築学並びに高分子・繊維材料に特色と強みがあることが認定されました。日本の国立大学は、北海道から沖縄まで、それぞれの特色と強みを明確にし、改めて自覚することによって役割分担とその責務を明確にしたわけです。

興味深いことに、京都高等工芸学校に端を発するデザイン学、建築学、京都蚕業講習所に端を発する高分子・繊維材料など、本学の特色ある分野は、大学の出自と歴史的歩み、京都という立地に裏付けられたものであることを強く感じます。こうした特色は、開闢以来115年の歩みの中で、本学の学風となり全分野の強みとなって現在に活かされており、トヨタ、日産、ホンダ、マツダのデザイン部長がすべて本学の1982年卒の同級生であることや、クラレ、ワコールなどの繊維関連企業の役職者が本学出身であることなど、卒業生の活躍に顕著に体现されています。現役学生の活躍においても、2012年度全日本学生フォーミュラ大会において、本学が総合優勝の栄誉に輝いたのに続いて、2013年度においても、総合5位の成績を収め、技術力の高さが示されました。また国際遺伝子改変マシンコンテストにおいて優秀な成績を収めたこと、さらに日本機械学会教育賞を連続受賞し、日本建築学会教育賞を受賞したことなどに見られるように、本学の教育指針は、実践的な工学教育の成果と共に学会でも高く評価されています。

一方で、大学の知名度の低さに悔しい思いをされた卒業生もいらっしゃるかと推察されます。しかし実際に卒業生に聞いてみると、大学の規模や知名度は関係がない、社会や会社においては本人が何をなしたかが最も重要である、とはっきり答える人が圧倒的に多い。あるいはまた、一般に本学の卒業生のイメージは、専門知識に優れ、技能を極め、真面目な人が多い、しかし、おとなしく地味であるとも言われています。このことについて経営者に尋ねてみると、おとなしく地味な人柄のどこがいけないのか、学長や教授陣、本人自身もまた、そのようなことを気にすることはないのだ、会社は必要だから皆さんを採用するのであり、多様な人材の中で活用していくのが会社の仕事である、島津製作所や堀場製作所など、京都の優良企業の中で本学の卒業生は高い比率で役職者を務めており、一般的なイメージで自らを縛りつけてはいけない、過去のイメージの中に自分を閉じ込めてはいけない、このような意見もいただいております。

さて、我々が、国際競争力を養い、世界に冠たる大学になるために、3×3プロポーショナル改革、クォーター制、ユニット誘致と呼ばれる3つの方策を実施する計画です。今年4月以降、ユニット誘致と呼ばれる方法でハーバードやスタンフォード、あるいはETHやRCAといった海外の有名校から講座単位で本学に誘致し、共同して教育研究に携わっていただくこととなります。同時に、外国にも拠点を展開していく作業を開始しますが、京都市内や京都府下、東京にも京都工芸繊維大学の拠点を整備していくことになるでしょう。

本学にとって何より重要なことは、今の勢いを学内全領域に展開し、生物、化学、機械、電子、情報さらに繊維の活性化につなげ、大学全体の発展につなげることであります。大学改革を断行し、大学改革を通して技術革新を起こし、社会変革と経済改革に寄与することが我々の責務であります。かつて第一次世界大戦後のヨーロッパにおいて、ロシア革命後のヨーロッパにおいて、混乱と変革の嵐の中で建築家ル・コルビュジエが自らの人生と職業に関して「建築かさもなくば革命か」と問いかけました。しかし21世紀においては、革命かさもなくば技術革新かといった二者択一ではなく、私たちが選ぶことのできる道はただ一つ、科学技術の力によって社会変革を成し遂げるのみであります。私たちは日本社会の深刻な諸課題に科学者として技術者として立ち向かうことを決心しなければならないと考えます。

さて、先月本学の卒業生が一冊の本を出版されました。本の主題は「おもてなしと防災」というものです。風変わりな主題ですが、おもてなしの精神を環境問題の基礎に位置付け、防災計画に展開するという内容です。

おもてなしは、オリンピック招致のスピーチで使われて以来、流行語ともなっていますが、その精神は、京都の文化的風土に根付いており、京都は元祖おもてなしの地であります。おもてなしの深い意味と多様な実践的内容は、とりわけ茶道、茶の湯において蓄積されてきたと考えられます。おもてなしは相手を思いやる気持ちの表れであり、逆にもてなしを受けたとき、相手の心遣いのありがたさを感じ得る感受性のことであります。こうした精神はものづくりにも、社会システムにも反映させなければならないことは言うまでもありません。一般的にモノづくりとは、望ましい社会を実現するために、科学技術を具体的な形にして、社会実装できる製品や商品を創り出していくことであります。

一方、おもてなしの心は、一期一会という機会にこそ最もよく発揮されなければならないと考えます。一生に一度しかない出会いの機会であるからこそ、常日頃から準備を怠らず、あらゆる事態に思いを巡らせ、心を尽くして来るべき時を迎える。本学顧問であり茶道裏千家15代家元千玄室先生は、「本当は、一期一会とは、死に物狂いで、今日その相手にお茶をさしあげたら死んでもよい、今日その方のお茶をいただいたら死んでもよい、そうした主（あるじ）と客の出会いのことである」と言っておられます。こうした生死に関わる苛烈な出会いの瞬間を一期一会と呼ぶならば、微笑みに満たされた優しさだけがおもてなしとは限らない。人と物との出会いにおいても、モノづくりにおいても、日常の利便性の向上に満足することなく、命に関わるクリティカルで生命財産に関わる深刻な局面においてこそ力を発揮するモノづくり、賢い技術の開発を行うべきであります。

明日、新たな一歩を踏み出す君たちに、古来からの伝統に従い、唐の詩人王維の五言絶句を贈りたいと思います。現代の私たちに翻案して言えば、「朝の雨が妙法の丘をうるおし、校舎の前の柳は青々と色鮮やかなり、卒業していく君に勧めん更にいっぱいのお酒 西の方陽関をいずれば故人なからん」故人なからん、西の方、西域の砂漠には知る人もいない、それでもなお孤立を恐れず、誇りを持ってどこまでも、「松ヶ崎の地から世界に飛翔せよ」。これは卒業生諸君への励ましの言葉であります。同時に私自身の決意表明であります。そして私たちがともに実現すべき約束の言葉であり、君たちに謹んで捧げるはなむけの言葉であります。

平成26年3月25日
京都工芸繊維大学長
古山正雄